

# 人文学がみる文化・社会・環境

## たとえば「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」について

出席●井上章一(日文研副所長・教授)＋稲賀繁美(日文研教授)＋阿部健一(地球研教授)＋鞍田 崇(地球研特任准教授)

地球研では毎年、国際日本文化研究センター(日文研)と合同シンポジウムを開催している。いずれも人間文化研究機構の構成機関であり、かつ同じく京都に所在する。昨今の地球環境研究では、社会連携がさかんに議論されるようになっているが、文化的側面についての認識は十分な深まりを示していないように思われる。日文研はいうまでもなく、文化理解のあり方を探求するプロ集団だ。両機関の「語り手」が集い、学問と社会の関係、人文学と環境学の連携のありようをざっくばらんに語りあった。

鞍田●地球研と日文研は、合同シンポジウムをすでに5回開催しています。まず、これまでの企画へのご意見やご感想からうかがいたいと思うのですが。

井上●私も稲賀さんも、この仕事にこれまで関わっていないのでよくは知らないのですが、講堂に市民を300人、400人集める催しでは研究が深まることにはなりにくいかもしれませんね。

鞍田●稲賀さんは、「こんなものがあったのか」という顔をされています。(笑)

稲賀●知ってはいるけれど、声はかからなかったというのが正直なところ。市民サービスという言い方はよくないけれど、そういうことを最低限やらないと地域に認められないことになりかねない、ということでしょうか。

阿部●稲賀さんは慎重に、「サービスという言い方はよくないけれど」という言い方をされましたが、環境学というのはまさにそう。つまり、研究者が一般の人に教えるというサービスではなく、一緒に考えるようにしないといけないと思っています。

井上●象牙の塔の学問ではなく、医者が患者に向きあうようなイメージでしょうか。ただ、患者さんだと、からだを治してほしいと医者にすがりつくんですが、知識がほしいと研究所にすがりつく市民がどれだけいるかは疑わしい。(笑)

鞍田●そうですね。求められている知識とはなんぞや、ということでもあると思う

### 日文研・地球研 合同シンポジウムの実績

#### ●ブレ開催

2008年6月21日(土)  
京都産業会館シルクホール  
「山川草木の思想  
——地球環境問題を日本文化から考える」

#### ●第1回

2009年5月9日(土) 日文研講堂  
「京都の文化と環境——水と暮らし」

#### ●第2回

2010年5月22日(土) 日文研講堂  
「京都の文化と環境——森や林」

#### ●第3回

2011年5月21日(土) 日文研講堂  
「環境問題はなぜ大事か  
——文化から見た環境と環境から見た文化」

#### ●第4回

2012年9月14日(金) 日文研講堂  
「文化・環境は誰のもの？」

のですが。

### 「町衆と学問はともにある」は幻想か

阿部●地球研は、地球環境問題の根っこは文化の問題だと考えている。口癖のようにそのように言っているが、じつは文化についてなにも知らなくて、「文化だよな、問題は」と言って逃げている。

稲賀●ひと口に文化といっても、東京で行政の関係者が言っているものと、京都で街の人たちが言っているものとは、ずいぶん違っている気がしますね。井上さんの言うように、医者と患者というメタファーのような面もあるけれど、京都ではむしろもっと積極的な市民の参加、つまり「寄りあい」のようなかたちがあった。人が集う場があったら、そこになんだか得体のしれない人がきてワイワイやっているというような……。

鞍田●その話は、研究者同士と、研究者と市民との関係の二つの方向に展開できそうですね。日文研も地球研も共同研究として、いろいろな人を巻きこんでいて、それこそ寄りあいの的に研究するところに

意義を有しています。それをさらに拡張して、研究者だけではなくて、社会も巻きこもうという点がもう一つです。

井上●私も、共同研究は心地よいサロンであってほしいと思っているので、選挙演説みたいな声を出すような集いはいやだな。「ぜひ、わが研究の成果に一票を」とか、そういうのはなるべく避けたい。人が大勢集まると、そういう声をあげる研究者もでてくる。

阿部●サロンや寄りあいの研究スタイルは京都のもの、という印象が強い。分野の違う人が好き勝手にどんどん発言する。街の規模とか歴史も関わっていると思いますね。

稲賀●外国の例をあげれば、たとえばパリ。わりと近所づきあいのネットワークが四通八達していて、ノーベル賞をもらった人とホームレスがいつしよに話ができる。それが「レビュブリック」なわけです。パリにはそんな雰囲気はまだ残っている。ドイツは、一つの都市はだいたい10万人規模ですから、市長さんは知りあいだというかたちで、かつこつきの「ビュルガー(市民)」という意識が浸透している。

鞍田●京都の街場には、そういったものが息づいていると考えていいんですか。

井上●京都の町人たち、とくにお金で苦労しない町人たちは、いろいろな道楽をする。普請道楽、着道楽、食道楽、下品なものだと女道楽。そのなかに、知識道楽みたいなものがあつた。ちなみに、大阪にも知識道楽はあつたんです。大阪の商人のなかからも、日本の学問はできた。その町人的な学問を大学という仕組みがつぶしたんじゃないかと思っています。

林屋辰三郎<sup>\*1</sup>先生なんかは、「町衆と学問はともにある」という幻想を生きた人でしたが、率直にいつて日文研なんかはそういうものをたたき壊す側にいる、大学と文部科学省当局と同じ穴のムジナだと思う。民博(国立民族学博物館)や地球研も同じとちやいますか。

\*1 はやしや・たつさぶろう、1914-98年。歴史学者。立命館大学教授、京都大学人文科学研究所教授、京都国立博物館館長を歴任。日本の芸能史研究の第一人者。さまざまな研究会を立ち上げ、共同研究の場を構築しつづけたことも知られる。著作は『中世芸能史の研究』ほか。

\*2 1885-1962年。20世紀物理学の巨匠。量子論によって原子構造を解明し、自然理解に大変革をもたらすとともに、第2次大戦時には、連合国の核兵器開発に関与し、科学が人類におよぼす影響についての考察を深める。冷戦時には、科学者の社会的責任について国際政治の場でも発言し、注目を集めた。



(左奥から時計まわりに)  
いのうえ・しゅういち  
専門は建築史・意匠論。日文研副  
所長。教授。二〇一三年から現職。  
いなが・しげみ  
専門は比較文学・比較文化。文化  
交流史。日文研教授。二〇〇四年  
から現職。  
くらた・たかし  
専門は哲学。研究推進戦略セン  
ター特任准教授。二〇〇六年から  
地球研に在籍。  
あべ・けんいち  
専門は環境人類学。相関地域研究  
研究高度化支援センターコミュニ  
ケーション部門長。教授。二〇〇八  
年から地球研に在籍。



## 同床異夢に生きる学者と町衆

阿部●いっぽうで、環境学は町衆と学者とがともに考えるべきステージにきています。最近はそのトランスディシプリナリティという言い方で表現している。

井上●環境問題に関しては、困ったことだと思った町方の人たちが、「だれか詳しい先生はいないのか」と探して呼んで、お互いに意見を交わすということはあるよね。たしかに、そこに可能性はあるんだと思います。

阿部●稲賀さんがフランスとドイツの例を出されましたが、それぞれのトランスディシプリナリティはおそらくあるのでしょう。だとしたら、日本あるいは京都ならではの形を考えることができるのではと思うのですが、どうでしょう。

稲賀●正直いえば、私はお座敷がかかった場は大嫌いです。関係が最初からセットされていて、エライセンセからのご意見拝聴みたいになる。

井上●でもね、招くほうの町方も、そんなにエライ人に来てもらったとは思ってなくて、わりと冷めた目で見ていますよ。(笑)町方にとっては、「芸妓遊びにあきたから、次は知識遊びをしようやないか」というていど話。芸妓の踊りを品さだめするように、文人たちのしゃべることについて、「あいつの話は値打ちないな」というような集いだった、もとはね。でも、そこを切り離して、象牙の塔をつくってしまった。環境という突破口から、大学に巣くっている人たちをもういちど芸妓なみに——といったら芸妓に失礼なんだけれども、座敷がかかって品さだめをされるような、そういう場でかわされる学問はあっているのかもしれない。

稲賀●ただね、座敷がなかったとしても、むかしだったら多クったって100人でしょう。井上●人数の規模がK点をこえると、スピーチは演説になるし、受けねらいになる。たしかに、腹をわって話しあうとい

うのは、規模の制限があるよね。

## サロンに社会を変える力があるのか

鞍田●環境学で現在試みられている社会連携は、サロンや座敷という言葉で表されるような雰囲気はなくて、どこか身構えたイメージがあります。でも、求められているのは、もっと緩やかというか、しなやかな形ではないかという気がするんです。

稲賀●いわゆる「サイエンス」では、新しい発見ができるのは25歳くらいが限度ですね。ということは、25歳までの経験でなければできないものが一つの模範になって、それを社会に広げようとなるのではないのでしょうか。もちろんサイエンティストのなかにも、たとえばニールス・ボーア<sup>\*2</sup>のようにノーベル賞の発見のあと、いわば社会のコーディネータみたいに関格を変容させた人もいますけれど。

阿部●いまではサイエンティストも、サイエンスコミュニケーションのように一般の人びととの関わりを試みているけれど、まだまだ少数。とくに若い研究者は、たとえばこういった座談会に出てくれといっても、そんな時間はありませんよと、自分の武器を磨くほうにいつてしまう。

井上●学界すぐろくの「あがり」みたいなものに囚われているあいだは、研究者の側が芸妓遊びのようなサロンを楽しめないということではないでしょうか。

鞍田●それって、どのあたりであきらめるものなんですか。

井上●私ははじめから捨てています(笑)。「あほらしい」と思っています、そういうすぐろくは。

稲賀●すぐろくを捨てた人の存在は、無益かもしれないけれど、社会設計上は、じつは安全弁とみなしうるものですよ。

井上●たぶん、すぐろくの「あがり」をめざしている若い人はサロンに寄らないと思うし、先生も、「君たちには20年はやい。

エラくなってから、サロン遊びをすればいいんだ」とおっしゃると思う。

ところが、エラくなった方は研究内容の説明を市民向けになさるとき、市民は数学とか化学式をぶつけられてもわかりませんから、わかりやすく言葉を組み立てようとされるでしょう。そのときに使われる、たとえば疑似社会学、疑似文化論に、ややもすればうさんくさいものがたくさんあるわけです。そこを見ぬける懐の深いサロンを、市民社会のほうでもはぐくんでいつてほしいものですが。

鞍田●知的サロンは広い意味での教養、人文的素養といえると思います。いっぽうで環境研究では、具体的な社会変革をめざしているところがあるんですね。そこからすると、サロンの集まりが、社会を変える運動的側面をもつ可能性があるのかどうかに関心あるところです。

## 環境学における価値判断と風土

阿部●少し補足すると、認識科学から設計科学へという流れがあります。どういうことかという、これまでは自然科学を中心にもつぱら事実命題を問うてきたわけです。「これは正しいのか、正しくないのか」と。そうではなく、とくに環境学は、これからは価値命題を問わなければいけない。あるかないかではなく、こうすべきだということを問うていかなければならない。

井上●なるほど。研究者の勇気というか、意気込みも問われる。だけれども、価値判断のさいに社会連携の場にて、そこでの支持をとりつけた研究者は、「おれだけじゃない。これだけの市民もおれと判断を共有してくれている」というように話をもっていきやすい。それは私を感じて

\*3 平成24年度日文研共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正:過去の検証と将来への提言」(代表:稲賀繁美)。

\*4 日本の中世に行なわれた捨身行のひとつ。南方浄土の補陀落をめざして、小船に単身で乗りこみ南洋に赴くというもの。紀州那智勝浦の事例が著名。

\*5 哺乳類のキヌゲネズミ科のなかまで、和名はタビネズミ。周期的に大発生と激減をくりかえすことが知られている。大発生して大移動するさいに大量の個体が死亡することから、集団自殺の例として引合いに出されることがある。

(次ページに続く)



## 人文学がみる文化・社会・環境

たとえば「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」について

いる、ややせつない方向、しだいに選挙運動に近くなる途なのではないかなという気がします。

鞍田●問題はそこですね。ただ、かつてサロンの担い手であった人文学そのものが、いま変わろうとしている傾向もある。稲賀さんの共同研究<sup>\*3</sup>のテーマは、そのあたりに関わるものかと思うのですが。

稲賀●「軌道修正」ですね。既存の航路はダメだとわかっているけど、新しい航路もみつきりっこないんだから、とにかく船出してやろうと。

阿部●まるで補陀落渡海<sup>\*4</sup>ですね。目標はあるけれど海図がない、あるいは、あると信じるわけで、いわゆるレミング<sup>\*5</sup>の自殺とおなじようにも思える。われわれが「設計」といったとき、あるべき姿というのは、じっさいには存在していない。まだ補陀落でしかない。

稲賀●設計ということで、どういうことを考えていらっしゃるのでしょうか。

阿部●ものすごく単純に言えば、あらためて豊かさを問うことでしょうかね。高度成長時代の延長線上で右肩上がりでありまえたと思ってきたものが、今回の震災でもろくも崩れたように。

稲賀●和辻哲郎や寺田寅彦もいつているけれど、まさに地震が典型的で、人間が設計してうまくいったとしてもかならず裏切られるという考えが日本人には無意識的に残っている。欧米式の設計思想とは本質的にあいられない要素を、われわれはたえずどこかでひきずっている。

阿部●寺田寅彦は『日本人の自然観』<sup>\*6</sup>で、自然観の違いが将来像や生き方の違いをもたらすのはあたりまえとしていますよね。そう考えると、環境学における価値判断もまちがいに、この風土から出てくるものであつてしかるべきだと思う。

## 知識と行動とをつなぐものとは

井上●日本的な環境研究がありうるのかどうかはわかりません。いずれにせよ、サイエンスが事実問題として掘りおこした

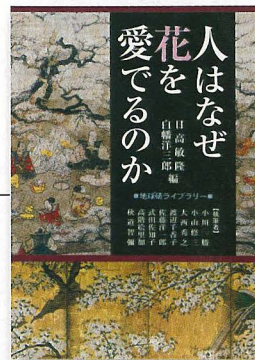
データに、善男善女はかならずしも従わないわけです。彼らは妙なことに怯えもするし、ほんとは怯えないといけないことに安心したりもする。科学者の目からみたら愚かにしか見えない部分もあるわけです。でも、そこを念頭におかなければ、そもそも設計なんてできないんですよ。人は設計者の思惑どおりに動くべきだという前提は、人間を相手に号令をだす以上、なりたたないと思います。

阿部●このままいくと地球はダメになるというのは、知識としては老若男女みんなに拡がっているはずですが、しかし、知っていても、人びとは行動にうつさない。国際的な研究の枠組みでその点を追及しているグループ<sup>\*7</sup>がいるのですが、彼らは知識と行動とをつなぐものとして、芸術をもちだすんですよ。

井上●日本的な芸術が隆盛するのは、応仁の乱から戦国にかけてのころ。つまり、世の中がいちばんすさんだときに花開くのが芸術。芸術を求めるといふ学者がいるのなら、彼の意識のなかでは、世の中がすさんでいるということになっているんじゃないでしょうか。

阿部●社会がすさんだ結果としての芸術ではなく、もうすこし能動的に芸術が使えないでしょうか。問題を理解しているのに行動をおこさないという現実の前で、研究者がこれまでしっかり考えてこなかった側面として、芸術に代表される感性的な部分の役割が注目されているのかもしれないという意味なんですけれども。

井上●わかりました。でも、私は芸術だのみという考えは——そういう考えに陥る人の気持ちはわからなくもないのだけれども、存外たいしたことはないと思っています。たとえば、地球研の建物は美しくできていると思いますが、この建築芸術として美しい建物がみなさんの仕事にどれだけ肯定的に役だっているといえるん



地球研ライブラリー『人はなぜ花を愛でるのか』  
日高敏隆・白幡洋三郎 編  
2007年3月31日 八坂書房  
同タイトルのシンポジウムを書籍化したもので、パネリストらによる論考を収録。考古学、人類学、遺伝学、生物学、美術史、文化史など、さまざまな視点から「花を愛でる」ことの意味が論じられている

でしょうか。

阿部●藁をもすがるといふ感じではありますかね。(笑)

井上●ほんとうはすがってらっしゃらないでしょう。感性的な部分人間にまったく影響しないとは言わないけれども、みなさんの論文を、この建築がどれだけ左右してきたかは、うたがわしい。かりに、なかなかいい研究ができないとしても、それはみなさん自身のせいなのであって、責任を建築になすりつけるわけにはいかないという気がするんですよ。

## 「人はなぜ花を愛でるのか」が問えるもの

鞍田●それこそ地球研の建物ができるとき、記念シンポジウム<sup>\*8</sup>が国立京都国際会館で開かれました。日文研の白幡洋三郎さんと地球研の日高敏隆所長との共同司会で、テーマは「人はなぜ花を愛でるのか?」。花を愛でるって、バつに生存に必要なわけではないけど、だからこそ人間と自然の関わり原点ともいえる。持続可能性という言葉がまさにそうであるように、環境学ではとすると、生きるため、生き残るためが不問のまま前提にされかねない。でも、文化の問題として理解するなら、それでは不十分ではないかと。

阿部●それがまさに日文研と地球研に共通する課題だと考えられたわけですね。

井上●「人はなぜ花を愛でるのか」はよいんです。市民の良識にもうけいられる問いかけです。でも、「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」は、明らかな厳然たる事実なんです、それを社会に投げにくいですよ。市民との連帯が難しいと思うところの一つです。

阿部●こんど投げてみたらどうですか(笑)。

井上●ほんとうの人文学は、世の批判を恐れず、すぐろくの「あがり」からは見ずてられても、「わしはきれいな女の子が好きや」ということをつき詰めるいとなみだ

\*6 明治から昭和初期にかけて活躍した物理学者、寺田寅彦の随筆作品。初出は1935(昭和10)年。「諸言」、「日本の自然」、「日本人の日常生活」、「日本人の精神生活」、「結語」の五章からなり、日本人の自然観について綴っている。

\*7 IHDP(地球環境変化の人間社会的側面国際研究計画)において2011年10月から開始されたKLSC(知識・学習・社会変革アライアンス)のこと。

\*8 人間文化研究機構 第4回公開講演会・シンポジウム/総合地球環境学研究所上賀茂施設竣工記念「人はなぜ花を愛でるのか?」(2006年)



京都・徳正寺の茶室「矩庵」。徳正寺は市内中心部に位置し、赤瀬川原平、藤森照信らの路上観察学会の京都でのたまり場でもあった。矩庵の設計は藤森の手になる。価値観と美意識の共有に裏打ちされた、京都ならではのサロンのような場の典型といえよう。写真は、地球研がNHK文化センターで担当する講座のひとつ。住職の秋野等さん（右端）が点てる煎茶をいただきながら、和やかな歓談のひと時を過ごした



と思うんです。

鞍田●「人はなぜ花を愛でるのか」はよいが、それだけでは足りないという指摘は私もよくわかります。日文研で、「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」というようなフォーラムはされたことはあるんですか。

井上●フォーラムに向いていないと思うよ。

阿部●そうですね。そちらは少人数の寄りあいやって、そこで組みたてたロジックを「人はなぜ花を愛でるのか」として大人数で……。

井上●無難な方向でね(笑)。

鞍田●でも、逆にいうと、寄りあいがなくなったことで、上ずみじゃないけれど、「人はなぜ花を愛でるのか」というような耳触りのよいテーマばかりになっているところがありますよね。

井上●無難だし、科研費でも通りやすいかもしれない。「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」では、そこらじゅうから閉めだされそうじゃないですか。

鞍田●そうなんですけどね、実は一般市民はそちらのほうが聞きたいんだと思うんです。

## 「毒」を積極的に評価する 視線の価値

井上●人文学には、人間の困った部分や暗い部分、業のようなもの、つまり人がふだん見たくないと思っているところも見すえるという使命があると思う。

阿部●「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」を、生物学者はDNAに還元して説明するのもかもしれないね。

井上●DNAで説明されると、きれいな女の子へのこだわりの深いところを説明されたようには思えない。なんかちょろまかされたような気がする。(笑)

鞍田●それはDNAだけではなく、宗教や信仰あるいは伝統でもない気がする。環境学で文化的な話になると、とかく宗教的背景や風土が持ち出されるんですが、

それはそれでキレイすぎる。

阿部●キレイすぎる、か。さきほど、人文学というのはドロドロした人間の深いところまで肉迫しているという話がありましたが、それは環境学においてもかならずどこかでつながってくると思います。

鞍田●フィールドでは生のそういう現場をみているわけですね。

阿部●人類学でいったら『マリノフスキー日記』がそう。プロニスワフ・マリノフスキー<sup>\*9</sup>がフィールドワークをしていたときのノートですが、そこには生々しい、それこそ一人の人間としてのマリノフスキーのいやらしい考え方ももしっかりと書かれている。けれども、公に彼が発表したのは、やはりキレイな話ばかりで。

井上●文部科学省あるいは大学という知の組織は、その薄まった美しい部分を評価しようということでも成りたっているわけじゃないですか。すごろくも、その途上にできている。毒になる部分を積極的に評価しようとはしていません。でも、私が魅力を感じる人文学者は、みなこの毒に敏感ですね。

## 知の再編の夢のあと

鞍田●たとえば関西に日文研や民博ができたということは、すごろくから離れるような人たちがいたからではなかったのですか。

井上●梅棹忠夫先生に聞いたことがあるんだけど、けっきょく、自分たちのやっていることは芸事で、国家が勘違いをしてこんなものをつくってくれたと言っておられた。梅棹さんは君臨した人だけれども、志はアナーキストだったんだと思います。

鞍田●環境学って、アナーキストにはでき

ないですかね。アナーキーな環境学。

阿部●ディシプリンにはなれないという意味では、ずっとアナーキー。あるいは、コミュニティではなくコミュニタス的な存在——これは前所長の立本成文さんがいつも言っていたことだけれども、つねにお祭りの、一過性の存在ではある。

井上●人類は最終的に自爆するのかもしれないのに、自分のつごうで地球をどんどん変えている。これはもう止められない。だけど、何パーセントかの人間は、「これでよいのか」と戸惑いを感じている。そんな人たちの戸惑いがいくらかなりとも解消される言葉を与えてあげるのが使命なんだ、と思えばいいのではないのでしょうか。

鞍田●心の安らぎを与えるような、ですか。

井上●もつと極端にいうと、建物を建てる時、地鎮祭をしますよね。あれは、地面にたいして申しわけないことをするので、地霊に謝る儀式なんです。そして、謝ったのだから、大きいものを建てさせるということになる。地霊よ、これ以上文句を言うなというわけです。地球環境にたいしても、「心配してあげたんだから、好きなようにやらせてくれ」というカラクリのなかに入っているのかもしれない。

稲賀●さきほど芸事の話がでしたが、もともとは祭礼であって、神さまに捧げるところが世俗化してしまった。生け花もそうですし、能にしたって奉納するものです。となると、民博も日文研も地球研も、つかの間の祭りを司っている現代の神社なのかなという気はします。

阿部●やっぱり、われわれはお祭りをやっているわけね。

井上●地鎮祭によばれる神主みたいな役回りだね。

2013年4月24日 地球研「はなれ」にて

<sup>\*9</sup> 1884-1942年。人類学者。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、のちにイェール大学で人類学を担当。第1次大戦中にニューギニアで長期にわたるフィールドワークを実施し、人類学研究ではじめて参与観察を導入したことで知られる。著作は『西太平洋の遠洋航海者』ほか。